

## 人間存在と真理-キルケゴールの實在論-

著者	千葉 泰爾
号	16
発行年	1970
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14957">http://hdl.handle.net/10097/14957</a>

千 葉 泰 爾  
ち ば たい じ

学位の種類 教 育 学 博 士

学位記番号 教 博 第 1 6 号

学位授与年月日 昭和 4 5 年 1 1 月 1 1 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当

研究科専門課程 昭和 4 5 年 1 1 月  
東北大学大学院教育学研究科博士課程

学位論文題目 人間存在と真理  
—キルケゴールの実存論—

論文審査委員 (主査)  
助教授 小 林 政 吉 教授 水野野 弥 彦  
教授 荒 井 武

## 論 文 内 容 の 要 旨

人間は無限・絶対・永遠の自己を求めて、そうあり得ない有限的・時間的存在である。自己の有限性の自覚に徹しつつ、絶対的真理を自己のものにしようとする。人間存在の内面の矛盾する現実の自覚に徹しつつ、本来的自己の生成の過程を具体的・現実的に生きようとするのが実存である。

実存は矛盾する現実根に根ざしつつ、いかにして本来的自己を生成せしめようとするのか。キルケゴールは、自己が自己の本来の根源と関係しえないことを、自己からの疎外と考え、それを罪としている。この自己疎外をいかに回復して本来的自己を生成せしめるかという問いが彼の思想の根本を貫いている。

彼は主体性が真理であると言う。その限りで言えば、本来的自己を生成しようとする実存の主体的努力は、この主体性においてなしとげられる。しかし主体的実存が負いめと罪をその限界の意識としてもつことを考えると、主体性は実存生成の否定的過程であると考えざるを得ない。従来強調されてきたように彼の思想は絶望や不安などの否定性によって特徴づけられている。しかしこの否定性はその超出の弁証法において語られているのではないか。彼の実存論の弁証法的構造からみて、実存の内在を否定する過程としての主体性概念は、それを超出した肯定的象面での実存のイデーをさし示しているのではないか。そして絶望と孤独に沈みこむ単独者の範疇が、自

己の本来の根源と他者にむかって人格的關係を回復するそのイデーがひそんでいるのではないか。人格的まじわりと愛のイデーが実存論の根本にあるのではないか。

彼は自分を例外者として意識しつつ、一般者との弁証法的關係をたえず顧慮している。そこから実存する単独者の覚醒という課題がうかびあがってくる。彼の著作家としての主要な意図はそこにあるわけだが、実存的伝達の問題として、それが実存論的にどのように基礎づけられているのか、それを伝達論として構造的にとらえてみることはできないか。これらの問いをめぐってキルケゴールの実存論を全体的に理解してみようとするのが主要な意図である。

全体を通じて私はとくに彼の実存論の基礎となっている弁証法を重視した。彼の思想表現の形式は直接法的であるよりはむしろ接統法的である。自己についての反省と他者への關係の反省とがつねに顧慮されており、それが弁証法的にからまりあって錯綜した表現を織りなしている。例外者・一般者・単独者の範疇相互においても關係は弁証法的である。このような弁証的構造をたえず意識しないと、キルケゴールの思想の真意は誤解され、われわれの視界から失われる危険がある。このような方法的意識にたつたならば、前提から帰結を求めつつ、帰結から前提をとらえなおす弁証法的連関においてこそ思想の真意がうかびあがってくると思われる。

キルケゴールは、決定的な矛盾を内にもつ人間存在の現実をどこまでも現実的にとらえようとしている。永遠と時間・無限と有限のごとき対立しあう両契機を断絶と緊張の弁証法においてとらえている。彼はそれを実存の現実とした。この現実に厳しくふみとどまろうとすることが実存の誠実な関心であり、現実に対する厳粛である。これをささえるものは、実存をその根源において確証しようとする根源的パトスである。実存の現実の矛盾は、媒介によって統一されない。主体的決断において、あれか―これかを選択し、本来的自己を確証しようとするのである。これが主体的真理である。

単独者の範疇は、主体性が真理であるとするときは、絶対者に対する自己の絶対的關係における自己の絶対性の意識である。しかし近代のこの自己一意識が、自己―疎外に陥っているところからキルケゴールの問題も発しているのである。つまり主体的に実存する単独者の範疇は、実存の否定的過程であり、内在の破滅であった。単独者が自己の永遠性を実現しようとする主体的努力は、究極的には、人間が内在において真理に關係しえない存在であることの決定的自覚としての罪の意識に衝き当たる。自己は永遠の絶対の根源から疎外されているのである。そこに絶望があり、孤独がある。ここで実存は最も深刻に「無とのであい」を自覚する。

彼がこのように内在の破滅を顕わにしてみせるのは、人間の内在がそのようなものでしかないとを自覚しつつ、しかもそうであることによって超越的真理の逆説的生起があるのだということとを弁証法的にとらえているからである。実存は信仰のパトスによってイエスという永遠の自己の根源と人格的に「であう」。ここで実存の自己關係は主体性―真理から主体性―非真理へと決定的に変質する。主体性の自己肯定に基く自己否定は、最も深い罪意識としての自己否定に徹して、その自己の現実を肯定する。この肯定性は自己の永遠の人格的根源を受け容れる受動性のパトスと關係している。

この人格的まじわりにおいて、実存は真理と愛とに自己をひらき、新たな自己関係を回復するのである。この肯定的受動性の象面から主体性の範疇を考え直すとき、それが実存生成の否定的過程であることが明かにされてくる。そしてそれとの弁証法的な関係において、肯定的受動性の象面が実存論の到達すべき真意であることもうかがわれる。

キルケゴールはこのような実存の生成を伝達しようとした。彼における伝達の弁証法は、深い意味で愛に基く人格的まじわりの実現への実存論的解明である。ここに愛の核心がある。愛は教育であると彼が言うとき、この教育は、他者から実存の根源力をひきだすことである。人格的まじわりにおける教育的行為の根底にひそんでいる愛のはたらきを、彼は教育の根源と考えている。

彼の実存論の全体的な理論にたつて、実存の伝達の構造を明かにしてみた。

## 論文審査結果の要旨

本論文の意図は、実存主義の先駆であるキルケゴールの主要著作を詳細にしらべつつ、その人間存在論を考察し、これを通して、実存としての人間の真の生活態度を示唆することにある。

本論文の構成は次の通りである。

序

第1章 思想形成の基底（4節）

第2章 審美的生と倫理の実存

第3章 主体の実存（6節）

第4章 実存と逆説的真理（2節）

第5章 孤独と共感（3節）

第6章 実存の伝達と覚醒（6節）

むすび

論者は、第1章において、キルケゴールの思想を内面から理解するために、彼のひととなりと当時のデンマークの思想状況を叙述している。就中、キルケゴール一家の特別な運命、父親の異常な気質と才能、その末子であるゼーレン・キルケゴールに対する厳格な家庭教育などを述べて、すでに幼い時から、自分を「例外者」とみなす意識が芽生えていたと主張する。次に、大学卒業後に起った深い自己反省、レギーネ・オルセンとの婚約、および婚約破棄という出来事から、自分の真に主体的に生きるとはいかなることについての徹底的な思索が起ってきたことを彼の日記などを通して指摘する。そして、この思索が、一方では、当時のデンマークの一般大衆の軽薄な風潮に対し、他方では、哲学界や神学界を支配していたドイツ観念論、ことにヘーゲルの哲学に対する対決によって、次第に形をとりはじめた経過をのべている。次に、第2章において、論者は、キルケゴールの思想の体系的把握にはいる。まず、彼の著作活動の前半期で生みだされた「審美的諸著作」によりつつ、享樂的審美的生活の論理的構造を明にし、そのゆきつくところに不安と絶望があらわれてくることを示す。そして、ここからの飛躍として人格的倫理的生活が生ぜざるをえない必然性を述べる。しかし、この飛躍の原動力は、キルケゴールにあつては、宗教的例外者の意識であつたとし、

ここから、倫理的生活にも満足できない彼独特の悲劇的生活態度が生れてくるという事情を説明しようとする。

第3章と第4章において、論者は、キルケゴールの思索の中心問題の一つである「主体的真理とは何か」に焦点をあわせて、論をすすめる。普遍的な認識主観としての人間ではなく、実存的な情熱の主体としての人間が、自分の生活に意味を与える真理を探して自己反省の道をたどるとき、そこには、多様な真理が次々に現れては、弁証法的にのりこえられていって、最後に、この実存の有限性と罪性とを告発する絶対的真理が超越的人格として立ちふさがる。そして、この実存に絶望と挫折を起させる。しかし、この時こそ、この実存が絶望と挫折とをのりこえて、超越的人格との出会いに進み出ることの教えられる瞬間である。ここに、主体性の挫折がその恵とへとひるがえってゆく弁証法的逆説の構造が明になる、と論者は述べている。

このような主体的な真理との出会いを、人格的な愛の実践という具体的な視点から論じたキルケゴールの「宗教的著作」によりつつ展開しているのが第5章である。

最後に、論者は、第6章において、上記のような主体的な真理との出会いとその実践という厳粛な生活態度を他者にむかっていかにして伝達しうるか、という問題をキルケゴールの晩年の著作の中から浮彫りにしようとしている。客観的な知識としての真理は、これを他者の知性に訴えて直接に伝達することが可能である。しかし、主体的実践の生活態度は、これを他者に直接に伝達することはできない。できるとすれば、ただ間接的に、である。すなわち、この主体が、他者との人格的なまじわりの中で、超越者を前にして倫理の実践にはげむという事実そのものをもって他者にむかう時、この事実が、他者の胸中に神をまえにした単独者になることへの目覚めを促す、という間接的伝達である。ここにおいては、主体的な真理との出会いを伝達しようとするものも、これを受取ろうとするものも、それぞれ、自己の内面において自己の罪性に目覚め、かつ、超越者によって許され励まされて進むという実存的出会いにおける危機の克服が行われてゆかねばならぬと、論者はのべているのである。

このように、論者はキルケゴールの諸著作によって、彼の実存的人間存在論をうかびあがらせる。そして、この研究を通して、現代の人間が真の厳粛な生き方を一人一人探究する課題を与えられている、ということを示唆している。

以上のような論考を通観すると、論者は、キルケゴールの著作を忠実に理解しようとするあまり、ヘーゲルに由来するキルケゴール独特の抽象的概念にたよりすぎている。これを更に自分のことばで表現しようとする努力がもう一段と望まれる。また、キルケゴールの魅力一つである人生の諸段階の弁証法的な展開をダイナミックにとらえる工夫がやや不足している。審美的生活から倫理的生活への移行は、たくみに説明されているが倫理的生活から宗教的生活への移行と宗教的生活の豊かな内容の理解は必しも十分とはいえない。この点は、第5章の叙述内容に殊に強くあらわれている。IronikerやPolemikerとしてのキルケゴールのかけに隠れているSeelsorgerとしてのキルケゴールをもっと掘みあげる努力が今後とも望まれる。それには、いわゆる「宗教的諸著作」のさらなる理解を必要とするであろう。

これらの不十分な諸点をもつにもかかわらず、本論文は、難解で分量の多いキルケゴールの諸著作を通読し、ここから人間存在論に関する彼の中心思想を適格にとりだし、最後には、真理の伝達の問題を手がかりにして、人間教育の可能性を深く論求している点で、独創的であり、学界に寄与するものが多いと思われる。よって、教育学博士を授与することを適当と認める。